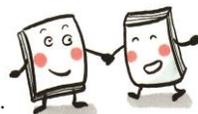


「夕日へ続く道」(石田衣良)

(生徒の感想)源ジイは面白い人だった。学校に行きたくない人も多分いるから、その人たちが雄吾みたいになってほしい。中学生の話だから、読みやすかった。

(保護者の感想)学校のばからしさに悩んでいた雄吾は源ジイと出会う…。それから雄吾の心に温かさが宿ったように思えて、人との出会いは大事なんだなあと思う。源ジイも雄吾もお互いの人生に必要な人だったのではと考えた。中学生ならではの悩みで、本の中身をより身近に感じた。



(3A Kくん親子の感想から)

(生徒の感想)途中で題名の意味を理解できました。源ジイが自分の病気を前から知っていたなら「いつ倒れても良いように雄吾を手伝いに誘ったのかな?」とか、「1人である雄吾を誘ったけれど心の中ではずっと心配していたんだろう。」とか思いました。雄吾が学校に行けるように最後まで歩こうとしている場面は1番印象に残りました。とても感動しました。

(保護者の感想)おじいさんが作った梅干しだけの素っ気ないおにぎり。雄吾が人の温かさを知るきっかけとなったおにぎり。手作りのものにはパワーがあるんですね。賭けを通して人の強さ、弱さ、温かさを知ることができました。とても、心温まる本でした。

(3A Kさん親子の感想から)

「オーロラを求めて」(星野道夫)

(生徒の感想)星野道夫のオーロラの写真がとれるまでのことが書かれていて、アラスカがすごく寒いのがわかりました。オーロラの撮影のためにひとりでいくのもすごいと思いました。星野道夫の友人「K」に女の子が産まれて、その女の子の誕生日が3月3日。星野道夫がオーロラの写真がとれて日が同じで、一緒にびっくりしました。

～3年生の保護者のみなさまへ～

家読へのご協力ありがとうございました。



大変お忙しい中、家読(うちどく)の趣旨をご理解いただき、読書の時間をつくってくださった保護者のみなさまに御礼申し上げます。素敵な感想が多く寄せられたのですが、紙面の関係で一部の感想しか掲載できなかったことをおわび申し上げます。思春期真っ只中のお子さんとは1冊の本を通して、多くの会話やふれあいのひとときが育まれたのであればうれしく思います。どうぞ、これからもご家族での読書の機会を大切にしてください。

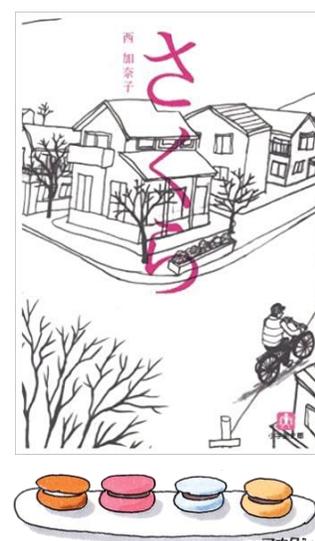
「さくら」(西加奈子) / 小学館

(生徒の感想)2020年11月に映画化された本です。次男が父・母・兄・妹・犬一匹との思い出を回想するところがおもしろかったです。比喩が難しかったです。人が生まれること、生きていくこと、成長していくこと、人を好きになること、死ぬことなどがとても美しく思えた1冊でした。

(保護者の感想)この本は明るさやあたたかや色、においなど新鮮な比喩が多く、1人1人の登場人物や場面が印象深い「絵」として見えてくるところがすばらしいと思いました。また、ジェンダーや障害者差別、性教育など、現代の問題ももりこまれていて、とても考えさせられました。

そして描写がとても美しく、ある家族の生き様と絆、ともに成長し見守っている犬サクラのあたたかさにとっても愛しく感じました。

(3A Hさん親子の感想から)



(保護者の感想)オーロラを撮影するまでのドキュメント、アラスカの過酷なまでの極寒の気温とその他の自然の凄さは本を読んでリアルに伝わりました。本の内容は撮影の行程より過程をかなり重視して山脈や氷河の土地の様子からそこまでの移動方法、それに食べものまで事細かく書かれていて、本の見開きの写真を撮影するまでの星野さんのこだわりと想いがよくわかりました。

(3A Aさん親子の感想から)

裏面もご覧ください。

「オーロラを求めて」(星野道夫)

(生徒の感想)この本を読んでいると、アラスカの透き通った冷たい風に吹かれて脳みそが研ぎ澄まされていく感じがしました。星野道夫さんの自然に見せられた気持ちがよく伝わってきました。ボクもオーロラを見ている気分になりました。

(保護者の感想)この本はアラスカのマッキンレー山とオーロラをバグに写真を撮るという前人未踏を成し遂げるノンフィクションドキュメント作品である。読み進めると大自然の神秘に遭遇したような感じがする。たとえばオーロラは北の空に出現し、やがて天空を覆い尽くし光が頂点に達した時、大閃光を放つことや、零下40度の世界では最新技術のカメラでさえ作動不動となるなど、1ヶ月間山にこもって撮影できたのは1日だけ。でも撮れた時の心中はいかばかりか。彼が事故で没して25年、人間と自然の関わりを改めて大切に考えようと思う。

(3B Kくん親子の感想から)

「52ヘルツのクジラたち」(町田そのこ/中央公論社)



(生徒の感想)52ヘルツのクジラ。それは世界にたった一頭だけ存在するようです。周りに生物はいるのに、助けを求めることができない、人間界でも同じことがあるでしょう。SOSが出れば助けられてもSOSをださずに1人で抱え込む人にはそう簡単に手を差し伸べることはできないでしょう。『世の中に多くいる「52ヘルツの人々の声を聞ける人になってほしい」そんな想いの感じ取れる、今の社会に必要な訴えをする一冊でした。』

(保護者の感想)誰かが、もしかしたら自分の側の誰かが助けてほしいと思っていたら、それを言葉で届けることができなかつたとしたら、私は気づいてあげることができるだろうか。いろんな声を聴ける心、人でありたい。

『わたしを見つけてくれてありがとう。』

とても複雑だけれど、希望を与えてくれるような物語でした。

(3B Kくん親子の感想から)



「ベラルーシの透明な夏」(佐藤しのぶ)

(生徒の感想)チェルノブイリの子どもたちは放射能汚染の被害を受けている。今までのその影響で心臓の病気にかかっている。でも佐藤しのぶさんは音楽で人々を結びつけ、音楽は奇跡を起こす力があると言っていて、本当にすごい人だと感じた。

(保護者の感想)オペラに全く興味のない私がこの本を読み、佐藤しのぶさんのことが気になり、思わずネットで調べ素晴らしい歌声を聴いてしまいました。この歌声が人々を感動させるのだと実感しました。本の中でも音楽には大きな力があると書かれています。私も音楽や歌声を聴き、心を動かされた経験が多々あります。音楽の偉大さを感じ取ることができる内容のお話でした。

(3B Rくん親子の感想から)

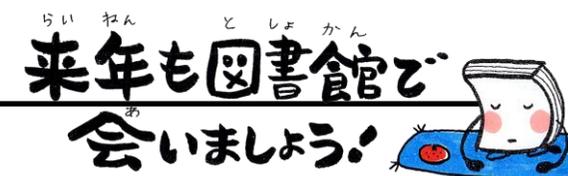
(生徒の感想)知っているようで知らないこと、知っていても何もできないこと、よくあります。そして自分の無力さを感じたときの苦しさ、よくわかります。「どんな境遇であっても生きる希望を持つこと」幼いながらにしてそんなことを求められなければならない世界があることが信じられないです。欲しいものが何でも手に入る生活は普通ではないです。突然、日常が奪われることもあります。なくなってから気づく前に、今を大切にしたいです。

(保護者の感想)読み出しからいきなり吸い込まれました。「生きる希望」「身体的ケアだけでなく心のケア」「病気を克服できるかは自分の気持ちにかかっている。」「病気を克服するには医療と同じくらい、いやそれ以上に夢や希望が必要。」そのことばもまるで宝石のように輝いていた。そして涙が止まらなかった。読み終えて、私自身が「命の輝きに逆に励まされた。」そんな気持ちだ。人は生きている、何のために生きている？死ぬまでの限られた命、時間の中でいったい何ができる？この本は私に大事なことを気づかせてくれた。そう、「明日への希望」

「明日への希望」があれば、人はどんな困難にも打ち勝つことができるのだと。

*「親子読書」本当に楽しくやってきました。私にとって子どもとつながる大切な時間でした。ありがとうございました。

(3B Mさん親子の感想から)



冬休み中の開館日について (本の貸出・返却・読書・学習などに利用してください。)

12月28日(火)(13:30~15:45)

1月7日(金)

終日(8:30~12:00)

13:30~15:45)